

## 「天使の卵」を読んで

電子工学科5年 大池 直子

私がこの本を読んだのは、この夏入院することになり、父が、退屈しないようにと本を何冊か買ってくれたのがきっかけでした。私はその時、突然の入院に戸惑い、なんだか周りのものが何もかもどうでもいい気持ちで、目の前の事実が受け入れられずにいました。そんな時にたまたま持ってきてくれたこの本を読みたいと思ったのは、やっぱり題名がその時の私の心境からして魅力的な物だったからだと思います。私はこの本の天使という言葉に惹かれました。なぜならその時にもし天使がいてくれたらいいのにと考えていたからです。

最初のほうは、よくある恋愛って感じの出だしでした。主人公のアユタは電車で一目見ただけのハルヒに恋をする。普通にありそうな日常から始まったこの物語は、なあってと少しつまらないもののように感じました。しかし、このまま平和に結婚とかそういう話になるのかなあと思って物語を読み進めていくと、「心の病」とか、「自殺」とか、なんだかへビーな言葉が出てきたので驚きました。この物語に出てくるハルヒは、昔の恋人が自殺をしたという過去を引きずったまま生きている女性でした。

ハルヒは大好きな恋人の異変に気づいてあげられず、そのせいで恋人は自殺してしまっただけという考えを捨てられずに生きていました。この部分を読んだとき、私は頭の中で考えました。もしも自分の大切な人が心の病になったら、もしそれで自殺をしてしまったら。私は親や友達のことを思いました。その瞬間、とても怖くなりました。ハルヒの深い悲しみが少しだけかもしれないけどわかる気がしました。ハルヒはこの後主人公のアユタによって心の病から開放されますが、やがてハルヒが突然亡くなってしまいます。アユタはハルヒに最後の最後に意地をはってしまったことを後悔します。失ってから気づくその存在の大きさに、アユタは涙します。

この本を読み終え、私はこの物語と自分の人生を少し重ねてみました。この夏入院になって、これからずっと食事療法を続けなければならない、不味い栄養剤をずっと飲まなければならないと知らされた時、私は最初の頃、「こんな不味いものを一生飲んで暮らすぐらいなら、死んだ方がいい！」と、平気で母に言っていました。しかし、この本を読んで、私が死んだらきっと悲しむ人がいるということに気が付きました。私は母に言ってしまった言葉でどれだけ母を傷つけたかがわかりました。きっと母は私がハルヒの過去を読んだ時と同じ気持ちになったに違いありません。人が死ぬというのは、それだけ重いことだということを、ハルヒとアユタに教えられました。私はもう軽々しく死ぬなんて言わない様にしようと思心に決めました。

最後の「ハルヒがいた。」という文で、私は、アユタはきっと、そこで乗り越えることができたのだと思いました。大切な人を失くした悲しみはなかなか消えないけれど、ハルヒはアユタの心の中で生き続けているというのを、アユタは感じる事が出来たのではないかと思います。私はこの本を読んで、普段何気なく一緒にいてくれる両親や友達の有難さを知りました。そして、大切な人をもっと大切にしていこうと思いました。病気のこと、今だったらもっと前向きに考えられるような気がします。